

NITS 動画教材「校内研修シリーズ」演習シート（解答例）

【No191：ESD（持続可能な開発のための教育）】

(1) 児童会・生徒会活動、クラブ活動として取り組む

児童生徒が主体的に ESD に取り組むためには、学校内に、エコクラブ、SDGs 委員会、ユネスコクラブ、といった児童生徒の自主的なグループを組織し、そうしたグループをコアにして、ESD を推進することが考えられます。また、児童会や生徒会が中心になって、サステナブルな学校づくりの推進を児童生徒主体で提案します。

(2) 校舎や校庭、学校周辺環境を活用して取り組む

校舎や施設を利用し、栽培や収穫活動を行ったり、ゴミの分別や給食の残食の削減、屋上の太陽光発電の活用などについて、学校内で指標化したりして取り組むことができます。

(3) 特別活動として取り組む

学校行事や野外活動、特別活動などを通して、児童生徒が持続可能性について自分事として考えることができる場を提供します。社会教育施設を活用する、地域や企業の SDGs に関連する取組について調査する、自校で行っている持続可能な社会の取組成果を修学旅行先で発表・広報する。連携している学校と「持続可能な社会」について議論することなどが考えられます。高等学校などでは海外の学校と SDGs の課題解決について英語で議論することも活発に行われています。

(4) 教科の学習の中で取り組む

各教科書の持続可能な社会に関係する単元において、「今日的課題」等の扱いで、SDGs について項目が立てられているので、そうした単元を活用して ESD を推進することができます。例えば中学校の国語や数学を例に挙げるなら、持続可能な開発の課題に関連する内容について書かれた論説文を読んで学ぶだけでなく、持続可能性に関わる複雑な課題について考え・意見を発表するための言語的技法を身に付けることができます。また、数学では、数的処理方法を活用して、持続可能性に関わる課題を統計的に分析し、将来の可能性について考察するといった学習につなげることができます。そうした国語や数学の知識や技能を、総合的な探究の学習に応用することができます。

(5) 「総合的な探究の時間」として取り組む

小学校では、各学年で川の生き物の観察、エコキャップの回収、伝統芸能の学習、いじめや差別への取組など多様な取組が行われていると思いますが、現状ではそれらの活動がつながりのないまま個別に展開されていることが多いです。生き物の観察は生物多様性の保持、エコキャップの回収は、循環型社会の形成、伝統芸能の学習は文化多様性の保持、いじめへの取組は人権の尊重といったように、総合的な学習の時間の取組を ESD/SDGs への取組として再構築することが可能です。

探究学習や課題研究では、「テーマ探究」の課題として「持続可能性(Sustainability)」を置き、個人別の「マイ探究」では、ESD の内容や、SDGs の 17 の目標を児童生徒個人の興味関心に応じてブレイクダウンして探究活動とすることができます。課題研究の内容としては、研究系の課題探究は、持続可能性の課題の解決方法を科学的な手法によって示す。行動系の課題研究は、地域の課題や地球的課題の解決方法を調査や提案や行動で示す。創作系は、ICT や AI など活用しつつ持続可能性の課題の解決方法をクリエイティブな手法によって示すことが考えられます。

(6) 学校全体（ホールスクール）で取り組む

多くの管理職を中心に、ESD が学校全体で取り組まれてきました。それらの手法をまとめると、ホールスクールで ESD に取り組むその展開方法には次のような共通点があります。

- ・単元の関連性を考え、資質・能力を結びつける。
- ・各教科間の関連を考え、資質・能力と結び付ける。
- ・各教科を総合の探究学習や体験活動、情報の ICT や AI の活用を結び付ける。
- ・学年の年間の活動にストーリー性を持たせる。

- ・学校全体で検討し、発達に応じた各学年間のつながりを考える。

ESD/SDGs カレンダーは1年間の学習進行計画です。

ESD/SDGs カレンダーは1年間の学習進行計画ですが、各教科における持続可能性に関する学びを、総合的な探究（学習）の時間を中心として集約します。ESD/SDGs カレンダー：ストーリーマップは、学校行事も取り込みつつ、年間の学習にストーリー性をもたせていることが特徴です。ホールスクールアプローチ・デザインシートは、中心に学校のビジョンを据え、学校の運営、教室内外の学び、地域との連携、設備と環境の4象限でESD/SDGsにつながる事柄を明確化します。以上のような手法を参考に、ホールスクールでESDに取り組む計画を立ててみてください。

(7) 学校が地域と連携して取り組む

持続可能な社会への取り組みは全社会を挙げての取組です。学校からのアプローチとしては、保護者と資源の循環や廃棄物の削減に関わる活動を協働で行ったり、自治会と連携して自然災害に備える活動を行ったり、社会教育施設、NPOと連携して生徒の学びの場を設定したり、地域でボランティア活動を通してESDの推進に貢献する方法などが、考えられます。

学校と地域が持続可能性に向けて課題意識と目標を共有し、地域が児童生徒の変容的行動を受け止め、影響を与えながら地域と学校が相互に変容することが重要であると考えられています。

(8) 地域全体（ホールエリア）で取り組む

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、全国のユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付けています。2026年現在、全国に1065の学校園が参加しており、地域におけるESD/SDGsの推進拠点として活動しています。

また、全国の諸地域で、持続可能な開発のための教育に関する地域拠点（RCE）、ユネスコの世界遺産、世界無形文化遺産、世界農業遺産、ユネスコ・エコパーク、ジオパーク、ユネスコ創造都市ネットワーク、SDGs未来都市、地域循環共生圏など、持続可能性にかかわる地域の取組が各地で盛んに行われています。ESDやSDGsに関連した理念として掲げる地域行政や教育委員会と連携した教育活動を行うことによって、教員や学校単発の教育活動ではなく、継続的に持続可能な地域づくりに取り組むことができます。